

絵本 Q & A

読み聞かせのしかたは？

絵本を使った実践とは？

おすすめの絵本は？

先生方の疑問に「絵本専門士」が答えます！

「読み聞かせで大切にしたいことは？」「さまざまな子どもへの読み聞かせのしかたとは？」——読み聞かせをするときの疑問に、絵本専門士であり、長年にわたって保育者・園長として実践を続けてきた杉之子幼稚園の鈴木直美先生がお答えします。日々の読み聞かせをより豊かな時間にするためのヒントが、たくさん詰まっています。

絵本専門士／
杉之子幼稚園
園長

鈴木直美

(すずき・なほみ)

学校法人石川学園

杉之子幼稚園（神

奈川県・私営）園長。複数の園で保育者を務めた後、園長として11年の経験をもつ。2015年には絵本専門士の第1期生として養成講座を修了。絵本に関する深い知見を生かしながら、絵本を通して子どもの豊かな心を育む保育を実践。



絵本専門士とは

絵本に関する高度な知識、技能及び感性を備えた絵本の専門家。国立青少年教育振興機構において実施される絵本専門士養成講座を修了し、絵本専門士委員会に認定されると、絵本専門士の称号を取得できる。2015年に第1期生が誕生し、現在は全国で約700人が活動中。

養成講座は30コマの授業の中で、絵本専門士になるために必要な「知識を深める」「技能を高める」「感性を磨く」の3つの領域を、半年間にわたってプロフェッショナルな講師陣に学ぶ。絵本専門士となってからは、幼稚園、学校、図書館、医療機関などのさまざまな現場で、読み聞かせ・お話し・ワークショップなどの絵本を使って行う取り組みや、指導・助言、人的・物的コーディネートなどに幅広く活躍している。

*絵本専門士の詳細は、下記でご検索ください。

絵本専門士 国立青少年教育振興機構

で検索

Q

読み聞かせをするときに大切にしたいことは？

A

絵本の内容に応じて、読み方や声かけを変えることが大切です。

子どもたちは絵本の読み手の声を通して人の温もりを感じ取り、絵本の世界に引き込まれていきます。だからこそ、読むときは早口にならず、テンポのよさを保つようにして、ゆっくり丁寧に読むことが大切です。ページをめくるスピードや間の取り方も、“ゆっくり”を意識しながら読み進めます。

ストーリー性の高い絵本を読み終えた後は、余韻を大切にしながら子どもの様子に目を配りましょう。子どもが空想世界に深く入り込んでいるようなら、「この登場人物をどう思った？」などと感想を引き出そうとせず、そっと終わるとよいと思います。逆に共有したいことがあって話しかけてくる子どもには、じっくりと向き合しましょう。

防災や交通ルールなどを扱った絵本であれば、読み終えた後に「これは、こうだったよね」と、

みんなで確認する形が考えられます。あるいは、植物図鑑のような図鑑類であれば、「これは園で育てているトマトと同じだね」などと、現実世界と結びつける問いかけをしながら読むと、子どもの興味を引きつけることができます。

本の種類や目的、子どもの状況に応じて、どのように読み、どうかかわるかを柔軟に変えていくことが大切です。

Q

読み聞かせは何歳くらいから始めるとよい？

A

生後6か月くらいから、絵本を見て反応できるようになっていきます。

子どもは、「絵を見る」「声を聞く」「文字を見る」の順で理解できるようになっていきます。個人差はありますが、生後6か月くらいで絵本への指さしができ、10か月くらいで読み手の声を聞きながら絵本を楽しめるようになっていきます。子どもの反応を大切にしながら、興味を示すものから読み聞かせ

を始めてみましょう。

また、多くの絵本は、開いたときに、各対象年齢の子どもの肩幅くらいになることを配慮した大きさで作られています。子どもが幼い頃は、読み手の膝の上に乗せ、一人ひとりに向けて読み聞かせをするとういでしょう。

Q 何度も同じ絵本を読んでもらいたがる子どもにはどう対応すべき？

A 何度でも一緒に、子どもの新しい発見を楽しみましょう。

大人はどちらかというと、俯瞰的な視点で絵本全体をとらえようとします。“鳥の目”で、絵本を読んでいるのですね。対して子どもは、“虫の目”のようにじっくりと絵の細部を見つめます。登場人物の表情、しぐさ、建物などの色や形、風景や季節の移り変わり、隠れている虫や動物など、何度も読み返しながら発見していきます。

子どもが同じ絵本を繰り返し「読んでほしい」と言うのは、そうした新しい発見が尽きないからです。「今日は何を見つけた？」などと問いかけながら、子どもが満足するまで、ぜひ何度でも一緒に読んであげてください。

Q 配慮が必要な子どもへの読み聞かせで意識するとよいことは？

A その子の安心できる場所とペースを大切にしながら読み聞かせます。

配慮が必要な子どもは、全体での読み聞かせが難

しい場面もあります。そうしたときは、絵本が見えやすい位置や保育者のそばに座ることで、安心して一緒に参加できることがあります。

集団が苦手な子どもには、個別に読み聞かせをする機会を設けて、一緒に絵本を選び、その子のペースに合わせてページをめくっていきましょう。選ぶ絵本も、保育者とやり取りができる、リズムや繰り返しがある、擬音語が楽しい、色彩がはっきりしているなど、その子の特性や興味に合わせた多様なテーマを取り入れるとういと思います。

Q 読み聞かせが得意でない保育者はどうしたらよい？

A 上手に読もうとせず、自分自身が楽しむことが一番です。

読み聞かせに苦手意識のある保育者もいると思います。声の出し方や話し方のくせ（早口であることや特定の語の発音が苦手なことなど）に悩む人も多いようです。

ただ、読み聞かせは上手に読むことが目的ではありません。大切なのは、保育者自身が絵本の世界に入り込み、楽しみながら読むことです。子どもたちは保育者の表情や声の調子を敏感に感じ取り、自分自身も共鳴します。保育者が恥ずかしいとか嫌だと思っていたら子どももそう思うし、ストーリー展開にワクワクしていたらそれが伝わるのです。ほかの遊びでも、保育者が面白がっていれば、子どもも楽しい気持ちになりますよね。

絵本の読み方には正解はありません。保育者一人ひとりの個性が、そのまま魅力になるのです。

保育者のみなさんへのメッセージ

子どもだけでなく先生にとっても、絵本は心を豊かにできる存在です。もし、絵本についてもっと学びたいと思ったら、絵本専門士養成講座への参加も検討してみてください。受講することで視野が広がり、新たな気づきや人との出会いがきっとあると思います。

絵本の力で保育をもっと豊かに！

神奈川県 杉之子幼稚園の実践

杉之子幼稚園の鈴木園長は、絵本専門士としての知見を生かし、約10年前から子どもたちが日常的に絵本に親しめる環境づくりに取り組んできました。かねてより念願だった図書室「ともだちや」を開設したほか、絵本に関する情報発信などにも力を入れ、子どもはもちろん、保護者や保育者も日常的に絵本に触れられるようにして、園全体の保育が豊かになることをめざしています。

● 図書室「ともだちや」の整備

空き部屋となった保育室を改装し、図書室「ともだちや」を設置しました。木材をあしらった温かみのある室内には、約3,000冊の絵本と約400冊の紙芝居がそろっています。さらに毎年、200～250冊を新たに購入しています。

蔵書は、「どうぶつ」「たべもの」「のりもの」「おばけ」「きょうりゅう」などジャンルごとに配置し、一部は人気作家別にも配置。子どもが自分の興味に合わせて選びやすい工夫をしています。

毎週、30分間の貸し出し時間を設け、子どもたちは好きな絵本を2冊まで自分で選び、家に持ち帰ることができます。また、保育中にもクラス全員で訪れて、自由に絵本を楽しんだり、保育者が読み聞かせを行ったりなど、日常的に絵本に親しむ場として活用しています。



● 「すぎバス」絵本コーナー

バスの形を模した、天井が低く狭いスペースで、子どもが1人で静かに過ごしたいときにも利用できる場所です。中に入ると柔らかな間接照明がとまり、落ち着いた雰囲気の中で、子どもは安心感を取り戻すことができます。

このスペースには絵本も置かれており、子どもは少しの間、集団から離れた1人の空間で、本の世界に浸ることができます。



● 園長だより「すぎっこ」での絵本紹介

毎月発行している園長だより「すぎっこ」では、月に1、2冊の絵本を紹介しています。あらすじに加えて、なぜこの絵本を子どもに読んでほしいのかといった保育者としての思いも添えています。

紹介する絵本のジャンルは、季節感を意識したものや、そのときどきの子どもの気持ちに寄り添う内容のものなどさまざまです。例えば、卒園を控えた時期には、年長児に向けてエールを送る絵本を取り上げることもあります。

「すぎっこ」は、保護者にとっては新たな絵本と出合う場になっており、家庭で絵本に親しむ時間も増えているようです。今後は、こうした絵本紹介を園のホームページでも発信し、園と家庭をつなぐきっかけの1つにしたいと考えています。

● ビブリオトーク

保育者が夏休みに読んだ絵本や書籍を持ち寄り、おすすめの1冊を紹介し合う「ビブリオトーク」を実施しています。紹介する本のジャンルは自由ですが、保育者は子どもに読ませたい絵本や、自身の考え方に影響を与えた1冊などを紹介しています。

鈴木先生のおすすめの絵本

『ことばのずかん こうえん いこう』

うえがきあゆこ
(植垣 歩子 作、福音館書店)



子どもが家を出発し、公園に向かうまでの道のりで出会うさまざまな「もの」に、名前が添えられている絵本です。普段は見過ぎてしまいがちなものに目を向けることで、「こんなものもあったんだ」と発見する楽しさが味わえます。この本を読んでから外に出ると、いつも通る道にもたくさんものがあることに気づけるでしょう。世の中には多様なものが存在していることを感じるとともに、語彙を広げるきっかけにもなる1冊です。年少児におすすめです。



『ねこのピート だいすきなしろいくつ』

(エリック・リトウィン 作/ジェームス・ディーン 絵/
おともたけ 大友剛 訳/長谷川義史 文字画、ひさかたチャイルド)



明るい色調が子どもたちの目を引き、期待感を高めます。ストーリーは子どもたちの身近な経験とつながっており、「次はこうなるかも」と予測しやすく、自然に物語の世界に引き込まれていきます。作中には歌が盛り込まれているなど、子どもたちが楽しく参加できる構成になっています。シリーズ展開がされており、年少児から年長児まで、幅広い年齢で楽しむことができます。



『100かいだてのいえ』シリーズ

(いらいとしお 作、偕成社)



縦長で迫力のある大型絵本です。ページをめくるたびに、1階から100階までさまざまな生きもののくらしが展開され、子どもたちは「この階ではこんなことをしている!」と、繰り返し読むたびに、驚きや発見を楽しむことができます。数字に興味をもち始めた子どもにもぴったりで、自然に数の世界に親しめます。

空、海、地下、沼など、多彩な舞台でのシリーズが展開されており、違った世界を楽しめる魅力があります。年少児から年長児まで、発達段階に応じて楽しめる1冊です。

